

新 おおさか KEYわーど 【第29回】

西照菴は夕日の名所 遠くに天保山と、超巨大なみおつくし

行楽の秋、読書の秋、芸術の秋などの到来だが、私は食欲の秋が好きである。中央市場に積み上げられている松茸を表紙に掲載したいとさえ思ったりするが、土瓶蒸しのレシピを書くのは面倒なので、今回も連作浮世絵「浪花百景」を頼って幕末の秋の風情を楽しむことにしよう。

「西照菴月見景」と題された表紙の作品。夕陽丘近くの上町台地にあった料亭・西照菴の情景である。

高台からの見晴らしが良く、明月に煌々と照らされて遠くに浮かぶ帆船が見えている。背後の山並みが切れているのが明石海峡だろう。満月が西に浮かぶのは明け方のはず、といった野暮は言うまい。紅葉に満月を揃えた千載一遇の秋の夜長の美しい演出である。



表紙画像の部分拡大図(天保山とみおつくし)

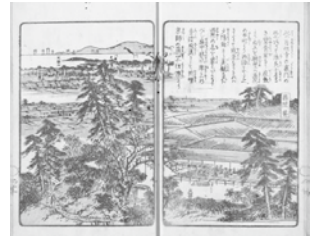
沖の帆船の手前にあるのが天保山(大阪市港区)。その隣にある大阪市の市章にもなった濡標は、やたらと巨大である。表紙の図版では小さくてわかりにくい、さらに手前の白い壁は、なんばパークスの位置にあった幕府の災害に備えた難波御蔵で、屋根が並ぶのは紀州街道沿いに連なる長町(現・浪速区日本橋)か。

西照菴の客室を見ると、画面右側の石垣の上には開け放たれて眺望の良さそうな座敷が連なり、点在する離れ座敷は洒落た円窓に灯がともって、なかでは美食の宴たけなわといった様子だろうか。園内の木々は紅く染まり、中央の渡り廊下は、もみじの名所、京都・東福寺の通天橋を模したと見える。

安政2(1855)年刊の『浪華の賑ひ』にも西照菴は登場する。同書解説によると「月江寺の裏門の西」にあった。光明山月江寺は現在も天王寺区生玉寺町にある浄土宗の寺院で、その西なら、大阪夕陽丘学園短期大学の北側付近である。

「浪花に名高き貨食家なり。座敷より向ふを眺望は浪花の市町より西海まで見えわたりて絶景なり。されば夕日殊さら美観なれば西照の名を蒙らするなるべし。庭中林泉、席上の普請風流にして所謂京師の円山に彷彿たり」(『浪華の賑ひ』)

松川半山(1818~82)の挿絵(右図)も大坂が一望でき、庭園や建物が風流なことは「浪花百景」の通りである。文中の「京師の円山」は京都の円山公園のことで、今もこの界限には料亭や茶店がある。寺社仏閣の近くには、法事や参詣の機会に利用する店があり、夕陽丘周辺には他に、浮瀬など「摂津名所図会」「東海道中膝栗毛」に登場する有名料亭があった。



「浪華の賑ひ」にある西照菴。この図が「浪花百景」の種本となったのだろう。天保山が描かれている。

西照菴のセールスポイントが夕日である。この地と夕日との関係は深い。「新古今和歌集」の撰者の一人、藤原家隆(1158~1237)は、出家して四天王寺の西側に夕陽庵を設け、「日想観」を修行した。「観無量寿経」などの経典に説かれ、西方浄土への転生を願い、往生に際して夕日を直ちにイメージできるための修行法である。家隆は「契りあればなにわの里にやどりきて波の入日を拝みつるか」の歌も詠み、大阪府史跡で藤原家隆の墓と伝わる五輪塔も夕陽丘にある。

ところで、上町台地の天王寺七坂を舞台とした有栖川有栖の小説集『幻坂』の一作に、谷町筋から安居神社へ下る辺りの割烹が舞台の「天神坂」がある。季節は晩秋、小糠雨の夜。五席しかない店のカウンターで、ウィットに富んだ幻想的な物語が展開する。初出の文芸雑誌で読んだとき、人間の生き方に季節の料理と大阪の歴史が重なりあい、名酒に微酔したような味わいを覚えた。天神坂は西照菴よりも南側で、浮瀬のあった方に近いが、小説にあるような割烹があつた辺りにあれば、夢うつつ暖簾をくぐって、舌つづみを打ちたいと思いつけている。

(「天神坂」初出は『幽』VOL.15、2011年。有栖川有栖『幻坂』は2013年にメディアファクトリーより単行本、2016年に角川文庫)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館教授(前館長)、大阪大学人文学研究科(兼任)。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大分県イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現像』(創元社)など。